

# 「農と食」 北の大地から

連載第 188 回

足寄発・放牧酪農とアニマルウェルフェア  
—「ありがとう牧場」の吉川さんに聴く(前編)—

のんびり草を食む牛たちと周りに広がる野山——都会の消費者がイメージする、こうした北海道酪農の姿は今や虚像に近い。酪農地帯で放牧された親牛を見つけることが難しくなったなかで自然体を崩さずに放牧酪農の王道を歩むのが十勝管内足寄町の芽登地区にある「ありがとう牧場」だ。代表の吉川友二さんは90年代の4年間、ニュージーランドで牧場実習を重ね、160頭の乳牛の飼育を任された経験もある。家畜と接するときの規範や心構えを意味する「ストックマンシップ」の重要性を学び、帰国後は自らの牧場で実践してきた。アニマルウェルフェア酪農への一番の近道は放牧に取り組むこと——その考え方や現状に対する意見を聞いた。

(7月23日、同牧場で収録)



▲傾斜がある放牧地で足腰の強い牛たちが育つ

◀「ありがとう牧場」の春の放牧風景。季節繁殖のため春先に出産が集中する

# 牛という動物の偉大さの理解と 生命に対する敬意が全ての基本



家畜福祉の近道は放牧の復活  
当たり前の農村風景を再現へ

1950年代に道北の開拓農家で生まれたわたしは、牛たちが牧場で草を食む姿を見て育った。70年代後半から80年代前半ころまで、夏場の放牧は牛飼いととってごく当たり前の生産技術でもあった。

近年、車で道内の酪農地帯を走っ

ても、牛の姿を見かける機会は少ない。大規模なフリーストール牛舎が建ち、混合飼料(TMR)の製造施設が造られ、牛のいない牧草地を大型トラクターが走り回る。

道農政部の調査によると、道内の酪農家のうち、本格的な集約放牧に取り組む農場は585戸と全体の8・8%にすぎない(15年の数値)。昼間のみや季節限定の放牧まで含め

ると2505戸(37%)に増えるが、牛たちを舎内に閉じ込める飼いが主流になっていく。

アニマルウェルフェア(家畜福祉)の基本は、それぞれの動物の習性や生理、生態をよく理解し、ストレスの少ない環境の下で飼育することに尽きる。草食性の牛は4つの胃を持ち、微生物の力で繊維分の多い草や木の葉などを栄養源に変えることが

できる優れた動物だ。トウモロコシなどの穀物を大量に与え、生乳生産装置のように扱うこと自体、アニマルウェルフェアを損ねてしまう飼育方法といえる。

放牧酪農に明るい畜産コンサルタントの須藤純一さん(仁木町在住)は、放牧酪農の有利性として、「飼料自給率の向上」「運動と採食機能の発揮」「疾病の軽減と供用年数の延長」「資

源循環・環境保全型の生産ができる」の4つを挙げている。牛たちの「行動する自由」を保障できる放牧酪農を推進することは、アニマルウェルフェア畜産を実現していく一番の近道なのだ。

## NZで放牧を学び足寄へ入植 規模拡大路線に警鐘を鳴らす

放牧酪農の本質に真摯に向き合い、自らの経営のなかで実践を重ねてきた人物が、足寄町内で「ありがとう牧場」を営む吉川友二さん(1964年、長野県生まれ)である。

自給自足の生活を夢見て道内各地の有機農家で学んだ吉川さんは、30歳のときにニュージーランド(NZ)へ渡る。放牧酪農が盛んな同国で実習を重ね、将来に備えるためだ。実習先へ視察に訪れた「足寄町放牧酪農研究会」のリーダー・佐藤智好さんと出会ったのが縁で2001年、同町の新規就農者第1号として「ありがとう牧場」をオープンさせた。

筆者はこれまで、「放牧酪農推進のまち」を宣言した足寄町や、放牧酪農研究会と吉川さんの取り組みなどについて何度か取材している(本誌12年7月号、04年2月号ほか・記

事は拙HPに収録済み)。ここでは、放牧酪農に対する考え方をはじめ、新規就農の歩みや農業政策に対する意見などについて紹介した。

しかし、アニマルウェルフェアの課題を取材したり、関連する市民活動に参加しながら、この問題に対する吉川さんの見方を聴く機会には恵まれなかった。そこで今回、NPO法人さつぽろ自由学校「遊」が主催する市民講座の一環で同牧場の見学会を行なった機会に、家畜福祉に対する率直な意見に耳を傾けてみた。

冒頭に書いたように、酪農現場では規模拡大が進み、牛を舎内に閉じ込めて穀物をたくさん与え、ミルク・マシニングとして扱う傾向が強まっている。米国の動物学者は、規模拡大による酪農家のストレス拡大と動物虐待の悪循環を指摘する。吉川さんは、悪しきサイクルを乗り越えるために「家畜を扱う人としての規範や心構え」を意味する「ストックマンシップ」の大切さを強調した。

舎飼いとセットの穀物多給によって、「コンクリート・メタボ・ストレス」で追い詰められている——と警告する吉川さん。あらためて放牧と家畜福祉について考えたい。



夏の夕刻、搾乳施設に向けて牧道を歩く牛たちを見守る吉川友二さん。足寄町内で新規就農の夢を実現し、20年近い歳月が流れた

# 規模拡大を見直し放牧の推進へ

足寄町「ありがとう牧場」代表

吉川友二さん

**家畜を扱う者の規範や心構え  
学んで牛を虐待しない酪農を**

——アニマルウェルフェアに対する基本的な見方を教えてください。

吉川 アメリカの動物学者で『動物が幸せを感じる』(NHK出版)を書いたテンプル・グランディンさんは、「動物福祉で一番の問題は、規模拡大して朝から晩まで働く農家にストレスがたまり、牛を虐待する悪循環に陥ってしまうことだ」と言っています。なるほど、と思いますね。ニュージーランド(NZ)の



(よしかわ・ゆうじ)1964年、長野県生まれ。北海道大学を卒業後、道内の有機農家などを訪ね歩き、94年にニュージーランドに渡る。6つの牧場で実習生活を送り、160頭規模の牧場を任された経験も。98年に帰国し、2001年に足寄町内で新規入植。現在、放牧と季節繁殖で約100頭の乳牛(うち経産牛は半数)を飼う。草地面積は約90ヘクタール。牛乳・乳製品の製造や農家民宿も手がける。  
※ありがとう牧場：足寄町茂喜登牛98-4  
Tel. 01562-6-2082 <https://arifarm.net/>

牧場で働いていたときにコンサルタントのボーン・ジョーンズさん(故人)から、我々が備えるべき「ストックマンシップ」の大切さを教えられました。これは「家畜を扱う人としての規範や心構え」という意味ですが、日本では学校でも酪農の現場でも、家畜と付き合うときの心得を教えてくれません。

——子どもの頃からそうした心構えを教える必要がありますね。ただ、日本では家畜として本格的に飼い始めた歴史が浅く、田畑を耕す役牛が中心でした。明治以降、外国から乳牛が導入され、やがて戦争の時代に入り、本格的な酪農が広まったのは戦後のこと。そのため、家畜の扱い方も未熟なんだと思います。

吉川 昔の日本人は半分動物のよな自我を持っていたので、役牛(労働に使う牛)主体のころは互いに溶け合った生活をしていました。そこでは「経済動物としてどう接するか」を考えるような歴史はなかった。一方、牧畜民族の人たちは動物と心を通わせることにロマンを感じるようですね。

——戦後、アメリカの穀物業界の戦略として、穀物の多給とセツトに  
られませんか。  
——「農家の人は大変だね」くらいの感覚でしょうね。  
吉川 小学校のころから「社会にとって何が大事か」をきちんと考えさせないと変わっていきません。トレーに入ったお肉しか見たことがない都会の人たちと、牛の偉大さが分かる人との橋渡しをしていくことが必要です。我々も酪農家として地道に発言していきますが、日本全体の教育の中に入れていく必要がある。

アニマルウェルフェアでインパクトが強かったのは、5年ほど前にニュージーランドで行なわれたシンポジウムで、研究者が「これからの畜産は培養肉との闘いだ」と真剣に話していたことです。今は培養肉の値段が高くて売れませんが、都会の人が「培養肉のほうがアニマルウェルフェアに則っているんだ」という話になるんじゃないか、と思った。

——どんな研究者が参加を。  
吉川 世界中の農業者が地球温暖化対策に貢献しようという会議です。それまで培養肉の話なんて聞いたことがなかったので驚きました。  
——培養肉と植物を原料にした肉もどきの2種類があり、後者は日本

なった酪農が増えてきた。関係者は物事をお金で判断するようになり、家畜との接し方まで考えが及ばず、修練する場もないわけです。

吉川 ニュージーランドは「ストックマンシップ」に基づいて牛飼いをやっています。ボーンさんは「家族の一員だと思つて牛を飼わなければ駄目だ」と指導しましたが、NZの酪農家は一人で2百頭ほどの乳牛を扱い、「家族の一員」と言いながら、経済動物として儲からないと淘汰する。「家族の一員の時期は稼いでくれる間」と割り切っています。

**放牧で分かる偉大な牛の力を  
教育のなかでも伝えてほしい**  
——僕は、アニマルウェルフェアの団体を創ったり、市民講座を続けてきましたが、農場は一つの共同体であり、動物たちもその一員だと捉えています。「一緒に働く仲間」という思想が根底にあれば、ストックマンシップに沿った家畜との接し方が生まれるんじゃないか。

吉川 舍飼いの「介護酪農」をする  
と、牛に対する尊敬の念が湧いてきません。牛は哺乳類の王者であり地球上で一番繁栄しているそうです。  
の食品大手も商品開発を進め、一定の需要もあるようです。今後、そうした需要は増えていくでしょう。  
吉川 個人的には、屠殺は現実としてあるけれど、動物が幸せに暮らし殺されるまで幸せに生きてほしい。死んでしまう運命であっても、肉として無意識に存在するより個体として存在するほうが牛も幸せじゃないかな。地球上に牛がいなくなり、細胞だけが培養肉として残るような世界では悲しいですよ。

**命懸けで乳をつくる牛の営み  
知ってほしい環境破壊の実態**  
——農場を大規模化して、動物を物として扱うやり方は大きく見直す必要がある。畜産製品の消費を減らす方向性を視野に入れないと、アニマルウェルフェアの本質は追求できないんじゃないかと僕は考えます。

吉川 「国産の牛乳を飲みなさい」と言うのであれば、国産の飼料で賄える頭数で満足するのが筋。アメリカから穀物を買ってきて生乳を搾っている、結局はアメリカや東京にお金を持っていかれてしまう。今はちよつと高いけれど、我々が北海道のトウモロコシや副産物を利用した

——放牧とアニマルウェルフェアについて考え方をお聞きたい。  
吉川 昨年、(一社)日本草地畜産種子協会のシンポジウムのなかでテレビの街角インタビューの様子が紹

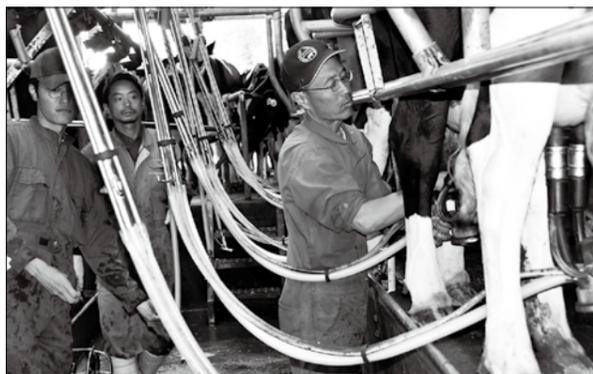


約90ヘクタールの草地を20数ブロックに分け、輪換放牧を行なっている。牛たちは広い草地でゆったりと過ごす

この素晴らしい動物は、放牧してみないとその偉大さが分からない。  
放牧した牛には生態系を変える力があり、強力なパワーを持つ植物を踏み倒して食べ、牧草地に作り替えてしまう。すごいことだと思いますね。牛の胃のなかに棲息する微生物の力を借りて植物の繊維分を分解してエネルギーとして利用する。その一方、微生物もタンパク源となるのです。

——牛は木の葉っぱも好みます。  
吉川 うちの牧場は、牛の舌が届く高さに木の枝がきれいに剪定され、見事です。20年ほど前に新規就農したとき、元の持ち主の草地は耕作放棄地と化し、鬱蒼とした萩原になっていった。そこに牛を放牧すると根つこが踏まれ、萩は枯れてしまったのです。萩原が元の牧草地に戻っていく光景を見て、僕は牛の偉大さを感じるようになった。放牧酪農家の楽しみは、牧場の景観が年を追って美しくなっていくことです。

介されました。マイクを向けられた若い女の子は「どうせ肉になって食べてしまうんだから、動物がどんな飼われ方をしてもいい」と答えていた。彼女たちはトレーに入ったお肉しか見たことがなく、責めるわけはいかないな、と思いましたね。でもロンドンで暮らしている知り合いの酪農家の娘さんは、「狂牛病が大発生したころ、殺される牛たちを見て市民が涙を流していた。都会の人にとつても、動物は身近な存在なんだと感じた」と話していたんです。日本では、口蹄疫に罹って牛が殺されても、涙を流す都会人なんて考え



ニュージーランド方式のパーラーで実習生らと搾乳作業。1頭あたり数分間で搾乳が終わり、牛たちは放牧地に戻っていく

ら、どれだけ農業全体が儲かることか。飼料ひとつとっても、皆で放牧をやって国産のもので地域循環をしていくことで、農業はまだまだ豊かになれるはず。脱炭素社会への道にもつながります。

伊達に住んでいた20年ほど前、僕はフィンランド語を学んでいました。夏休みにフィンランド人の先生の娘さんが日本に遊びに来て、スーパーでレジ袋を渡されて激怒したんです。向こうの大学生はレジ袋に激怒するくらいの教育を受けていた。日本の学校では、アニマルウェルフェアの

話にしても、「これからの社会をどうしていくのか？」という肝心なことが何も議論されていません。社会を良くするための勉強をしていないわけで、「自分はこう思う」と、皆で議論できる場がほしいですね。

吉川 スーパーで牛乳を買っている消費者には、牛が命懸けで牛乳をつくっていることが分からない。牛乳を飲んでいても「牛の生命」という感覚がないのです。パッケージに入った牛乳しか知らないと、アニマルウェルフェアと言われてもピンとこないでしょうね。

——そんな状況を変えるには？

吉川 「北海道では皆、放牧しているんだ」といった嘘のイメージではなく、環境破壊をして生産している現状も知ってもらわなければなりません。わたしが「バイオガス発電なんていらぬ。牛の頭数を減らし、糞尿を土に返すのが一番。無駄な補助金は出すな」と書いたのを読んだ、ある道議会議員が先日、うちの牧場を訪れました。「バイオガス発電が糞尿処理の問題を解決してくれる」と思っていたと話す、その方にとって目から鱗の話だったそうです。わた

しは、「バイオガス発電なんて効率の悪いものは造らない」というオランダの事例を聞いていました。

——オランダは工場畜産が盛んな国ですが、その一方で放牧養豚に取り組む農場もあるといえます。

吉川 日本の酪農家も「放牧は非効率だ。一頭あたり年間1〜2万キロ搾りなさい」と指導され、頑張ってきた。だから、「いきなり放牧なんて出来ないよ」という先輩の酪農家もいます。昨年、女性の酪農ネットワークの集まりで、4百頭くらいの搾乳牛を飼うオランダの酪農家に嫁いだ人が講演し、「今さら放牧と言われても困る」と話していました。

放牧に明るい畜産コンサルタントの須藤純一さんによると、欧州では夫婦で放牧酪農を営み、搾乳はロボットが多いといえます。ロボットの導入目的は、規模拡大のためではなく、お金よりも時間がほしいからです。日本は逆に、規模拡大とロボット搾乳がセットになっています。

——フリーストール牛舎やロボット搾乳、コントラクターの利用にしても、規模拡大のために導入してい



バルククーラーに入る前の生乳。一部は牧場産の牛乳やバターなどに加工・販売する



スーパーの店頭で並ぶ道産品。放牧牛乳・乳製品を扱う店はまだ少ない(東京都福生市の「福島屋」で)

ニュージーランドの獣医さんが編集した本にも、そうした分析が載っています。NZでは、生後3カ月を過ぎた牛の除角時には麻酔をするという法的な基準もあります。

放牧酪農家の牛と舎飼酪農家の牛では、平均産次数が異なります。放牧にも様々な形態がありますが、北海道では夏場の5カ月間ほど放牧するだけで0・5産以上は違うのではないのでしょうか。野山を歩き回る放牧酪農家の牛は長生きしています。なぜかという、舎飼いの牛はコンクリートの上で24時間立たされているストレスがあるからです。

——人間に置き換えてみると理解できますね。

吉川 舎飼いと穀物の多給はワンセットになっています。本来、牛は草を食べる動物ですから、100%穀物を与えると死んでしまう。死ぬか生きるかギリギリのところ、穀物を多給し、たくさん乳を搾ろうとすると、人間でいうメタボになって早く死にすわるわけです。コンクリートとメタボ、そして様々なストレスによって、牛たちの産次数が少なくなってしまう。

(次号につづく)

今、コロナ禍の影響をほとんど受けていないのに、酪農家が一定の条件をクリアすると、軽トラやトラクターを買っても補助金が出るそうです。そんなお金があるなら、花卉栽培など影響を受けたところへ集中的に交付したほうがいい。環境を破壊するような酪農に支出するのはおかしい。儲かってない人が大規模化のために使う補助金によって、ますます経営が危なくなる本末転倒なことが行なわれています。まずは、こうした補助金をやめるべきです。

**穀物の多給でメタボになる牛産次を増やすオランダに学ぶ**

——国民が具体的に指摘しないと、効率ばかり追求して家畜を痛めつけ、家畜福祉を損なう結果になります。

吉川 この20年間で日本の酪農家戸数が半減したことが、生乳不足の一番の原因です。まず、若い人たちが「これなら継いでいいよ」と思える、生活重視の酪農が求められます。規模拡大のためではなく、生活を良くする農村づくりの補助金に転換して後継者を残していけば、これほど戸数は減らなかつたでしょう。そのあたりの総括が必要です。

わたしが新規就農したころ乳価はキロ78円でした。「60円に下がるから規模拡大して、TMR(混合飼料)とフリーストール牛舎で1頭あたり乳量を増やし、年間出荷乳量が千トンを超えないと生き残れない」と指導され、酪農家は嘘の情報を信じ込まされたのです。そのとき、「60円になるから皆で放牧しよう」という道を選択していれば、こんなに農家の数は減らなかつた。結局、乳価は74円くらいまで下がり、後は反転して百円まで上昇しました。

——経営の悪い農家を助けるために、彼らの生産費を基に百円乳価にしなければならなかつたわけです。農家や日本全体の人口も減り、高齢化が進むなかで、生活重視の畜産の形態を追求する生き方がある。畜産製品の消費が縮小に向かうのは自然な流れです。そうした状況には目を向けず、農家にぶら下がる人たちが食べさせるために旧態依然のやり方をくり返しているように映ります。

吉川さんは酪農雑誌に寄稿した一文のなかで、オランダ政府が採った環境・アニマルウェルフェア政策について紹介しています。「15年4月から新しいリン酸排出量の制限を行な

う」「乳牛飼育頭数を4%減らす」などですが、20年までに乳牛の平均産次を3・1産から5産まで引き上げること目標にしている。北海道の平均産次数は2・5産ほど。オランダは3・1産から5産に引き上げる方向といえます。「5産の平均産次は牛の品種改良だけでなく、放牧を取り入れることによって初めて可能になる」と書かれています。もう少し分かりやすく説明を。

吉川 産次数を見ると、牛がどれだけ過酷に飼われているかわかり、アニマルウェルフェアの一般的な指標になり得るということだ。

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。